

2022年2月27日（日）

宣教 「死と復活の予告」

聖書：マルコによる福音書8章31節～9章1節

◆イエス、死と復活の予告する

31:それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。

32:しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。

33:イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

34:それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。

35:自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

36:人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。

37:自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。

38:神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる。」

9章1:また、イエスは言われた。「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる。」

みなさん、おはようございます！

今日で9時30分からのこのライブ配信は終わり、3月からは10時30分から自主礼拝前の短縮した礼拝を捧げます。礼拝の祈禱と宣教・メッセージはライブ配信を行います。

さて、今日の聖書の個所は、イエスの弟子のペトロがイエスに対して、「あなたは、メシアです。」と告白したことに続いて起こったこととして報告されています。この話はマタイによる福音書及びルカによる福音書にも記されています。重要なことであったと思われます。ちなみに「あなたは、メシアです。」との

ペトロのメシア告白には、メシアを偉大な存在として、この世の権力者として政治的に受け止める思いや考えがあったのではないかと思われます。つまりメシアとして、この世を王のように治める存在としての理解です。確かに旧約聖書には、世を治めるメシア理解の個所もあるとは思いますが、イエスの心にあったのは、この世を政治的に、また軍事や権力によって治めるメシア理解ではなく、イザヤ書53章にある、「苦難のしもべ」としてのメシア理解であったのだと思います。現在のこの世の秩序と、神さまの理解、イエスの思いは異なっているということです。この世界では地位を持つ者が力を持ち、言葉巧みな者が指導者となり、どの組織でも媚を売る者が出世するかのようです。しかし、神のひとり子イエスの思いと考えはそうではない！のです。

今日の聖書のことばに聞きましょう！

マルコ福音書ではイエスは受難の予告を3回されています。今日の個所は1回目です。

◆イエス、死と復活の予告する

31:それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。

マルコ福音書によればイエスさまは、ご自身のことをよく「人の子」と呼んでおられます。天と地を造られた愛なる神さまの意志をこの世に現すためにお生まれになった方、それがイエスさまです。イエスが語られること

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている。」

は神さまの計画、神さまが決めておられることだということです。

イエスは、この世で多くの苦しみを受けると言われます。

そして、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺される。ここで言われる「長老、祭司長、律法学者たち」とは、約2000年前当時のユダヤの国の最高議会を構成しているメンバーたちのことです。それらの人々からご自身が排斥されついに殺されることをイエスはこの時すでに感じ、知っておられたようです。それを覚悟の上で人々の中に入り、悲しんでいる人々、苦しんでおられる人々を励ますことばを語り続け、いやしの業を行っていかれたのです。それは神さまから託された使命であったのです。

イエスは権力者に排斥されて殺されるけれども、しかし、死で終わりではないということが語られます。「三日の後に復活することになっている。」と。

聖書のことばは、イエスさまの言葉を聞いた人たちが、伝えたものです。

史実として、イエスが「三日の後に復活することになっている。」と語られたかどうかは、今日確かめることはできませんが、マルコが聞き、伝えた言葉として受けとめ、わたしは信じます。つまり、イエスの受難と十字架の死、復活が神さまの救いの計画そしてその実現だということです。このことを信じる人々もいれば、信じない人々もいることも事実です。

このような話を聞いたこともない人々も日本にも多くいることでしょう。

ですから信じる者たちが心をこめて伝える必要があるのだと思います。

聖書によれば、イエスと共に過ごした人たちや後の弟子たち、ステパノや伝道者パウロなどが先駆けとなって働いたのです。それに続く人々を神さまは歴史の中で起こされました。そして今日、わたしたち信仰者がいます。

32:しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。

イエスが話すやいなや、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めたのです。ペトロは弟子たちの中でも中心的な人ですが、でも自分の感じたようになってに受けとめる正直なようですが、時に少々困った面のある人物のように思えるのです。ペトロは人間的な人間だと言えるようにも思います。しかし、ペトロも神さまの働きかけにより少しづつ変えられて行きます。人が少しづつ良い方向へと変えられ行くことも主の恵みだと思います。

この時のペトロはイエスさまが、この世的なリーダーになる方だと思い、またそれを願っていたようです。なのに、今イエスが、多くの苦しみと、排斥の死のことを語られることを、受け入れることが出来なかったのです。わたしを含めて、ほんんどの人は、いくら学んでも、自分がそうだ！と心から気づいたことしか受け入れることはできない、のだと思います。

自分の心の内の思いを一つ一つ点検することがいかに大切なことかと思えます。

わたくしごとですが、日々の中で静かな時間に自分の心の思いをメモなどで書いてみるがあります。すると、自分の心の中に、今まで気づかなかつた心の思いがあることに気づかされるのです。将来への不安や心配ごと、自分への不満や人への怒りなどなどです。それを神さまに祈ります。するといつもいつもということではありませんが、心に平安が与えられる思いになることがあります。人には、自分の知らない、気づいていない心の動きがあるようです。神さまの前で、自分の心の動きに正直になり、神さまに語りかけることの大切さを思います。神さまの愛の力である、慰め主である聖霊が導いてくださることなのだと思います。少しづつ心が解放され楽になって行く体験で感謝です。

さて、ペトロのことばに対して、イエスはペトロの心の内を見抜いたかのよ
うに、毅然として言われました。

33:イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

サタンとは、人の心の内に入ってくる力、つまり悪魔のこと。その正体はや
さしい言葉と装いで、人に気に入られること、人を自分の力で動かそうとする
力、愛なる神のことを思わない力です。この力は日常の中で迫って来るのです。
人はサタンの力には勝てないのです。しかし、イエスさまには勝たれるのです。
主イエスは弟子たちにサタンの力に負けないために、神に祈ることを教えてく
ださいました。「主の祈り」を教えてくださいました。主の祈りは世界を包む祈
りと言われます。わたしたちは、祈ることができます。わたしたちは愛なる神
さまに具体的に祈ることによって、心の内に動くサタンの、心を騒がせる風船
をつぶすことができるのです。祈りは世界を包むことが出来るのです。

そしてイエスは愛する弟子たちと群衆を呼び寄せて切々と語られたのです。

34:それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従い

たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。

イエスに従う道こそが一番安全な道だと言われるのです。

具体的には、

35:自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音の
ために命を失う者は、それを救うのである。

「自分の命」。命は人間にとって一番大切なものです。沖繩のことばに「ぬち

どう 宝」とあります。「命こそが宝」という意味です。沖繩の人たちは

先の戦争で多くの命が奪われました。その無念の教訓からのことばです。

断じていかなる理由があれ命を軽んじてはならないのです。私たちは、命を
大切に人生を生きるのです。

大切なことは、その命をどのように用いて生きるのかということではないでし
ょうか。自分の利益のために用いる。それだけで良いのだろうか。

イエスに従いたいと思う者の生き方は、「わたしのため、また福音のために命を
失う者は、それを救うのである。」これは愛に生きる道のことだと思ふのです。

若い日にある牧師から「苦難の連帯」ということばを良く聞きました。最近よ
く思い出すのです。悲しんでいる人と一緒に悲しむ、苦しんでいる人と一緒
に苦しむことだと思えるのです。それが愛だと。

「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」負わされた、与えられた
十字架、重荷を背負って生きなさい。背負う力は神さまとイエスさまが与えて
くださるのです。いやむしろイエスさまが先に重荷を背負ってくださるので、

結果的にわたしが背負う重荷は軽くなるということです。イエスさまは言われます。イエスさまは言われました。「わたしの頸木は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」と。

そのようにして生きる人生の日々は、イエスさまの復活の光に照らされて、永遠のいのちへの希望に約束された人生なのです。

自分の十字架を背負って、イエスに従う生き方をした人として以前お話したことがあるのですが、

ディートリッヒ・ボンヘッファーのことをお伝えしたいのです。

ボンヘッファーは、先の戦争時、ドイツの独裁者ヒットラーに抵抗して生きたドイツの牧師・神学者です。彼は秘密警察に逮捕され、今から72年前1945年4月9日にフロッセンビュルク強制収容所で処刑されました。満39歳の生涯でした。彼が処刑される前年、アドベントの季節に収容所でつくり、クリスマスを前にして家族と恋人に贈ったと言われている詩が「善き力にわれ囲まれ」という詩です。その詩は讃美歌となって今や世界中で歌われています。洲本教会の聖歌隊でも礼拝でも歌ったことはあります。

彼は戦後のドイツや世界のキリスト教会に大きな影響を与えた人物です。

ボンヘッファーの肉体は死んだのですが、彼のキリストと共にあるいのちは、彼の心と思い、思想と精神は今も生きて、世界中で人から人へ伝えられているのです。

わたしたちも、神の光の中、それぞれ自分の十字架を背負って、主イエスに従い、その苦しみと復活の希望に与ってこれから先も日々生きて行きたいと願います。最後に讃美歌になった詩を読みます。

「善き力にわれ囲まれ」

- 1 善き力にわれかこまれ、
守りなぐさめられて、
世の悩み 共にわかち、
新しい日を望もう。
- 2 過ぎた日々の 悩み重く
なお、のしかかるときも、
さわぎ立つ 心しずめ、
みむねにしたがいゆく。

*善き力に 守られつつ、

来たるべき時を待とう。
夜も朝もいつも神は
われらと共にいます。

3 たとい主から 差し出さ
れる杯は苦くても、
恐れず、感謝をこめて、
愛する手から受けよう。

4 輝かせよ、主のともし火
われらの闇の中に。
望みを主の手にゆだね、
来たるべき朝を待とう。

*善き力に 守られつつ、
来たるべき時を待とう。
夜も朝もいつも神は
われらと共にいます。

*われらと共にいます。

皆さまの上に、主の平安を祈ります。